2024年6月10日
T.Kobayashi

六月　深川ぶらぶら歩き

6月7日、やや雲がちではあるが強い陽差しの朝、通勤時間帯を過ぎて静寂が戻った本八幡駅を出発。
都営新宿線は、ほぼ南西に向かって走り、江戸川を渡り東京都に入る。瑞江駅を過ぎて暫く走ると西側に進路を変えながら新中川を渡って一之江駅に入る。そして船堀駅を過ぎると荒川を渡って江戸川区から江東区に入り、東大島駅に着く。江戸川・新中川・中川・荒川といくつもの流れを横切る風景は、ここが河口の洲であることを再認識させてくれる。

<1>　中川船番所資料館　https://www.kcf.or.jp/nakagawa/

東大島駅で下りて南へ歩くこと5分足らずで、旧中川の流路の痕跡が残る水路の脇に「中川船番所資料館」が建っている。
1590年頃に江戸を居城とした徳川家康が、兵糧としての塩を確保するために、行徳から江戸湊（日比谷あたりか）への輸送用水路として、小名木四郎兵衛に命じて開削させたのが小名木川。
1659年（万治2年）には、本所・深川の水害対策として竪川などの水路の掘削と浚渫土の積み上げによる嵩上げが進められて、さらに東西・南北に何本もの水路が作られた。
そしてその結果、江戸に出入りする川船の検問を目的として、1661年（寛文元年）に小名木川の東端である中川との接続部に、開設されたのが中川船番所である。
資料館には、東京湾の地理的形状の変遷や、江戸時代を中心とした水路や水運の発達の足取りがわかるような資料が展示されている。
＊参考情報 「三ツ目通りと四つ目通り」 http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/mitsume.pdf

<2>　芭蕉記念館と芭蕉稲荷　https://www.kcf.or.jp/basho/

東大島駅から再び新宿線に乗るとやがて地下に入る。森下駅で降りて新大橋まで歩き、隅田川に沿って南に進む。この道は今では「萬年橋通り」と名が付いているが、その昔は「一つ目通り」と言われていた。
前項で記述のように、開削した竪川堀に架けられた橋に、西から順に番号順の橋の名前がつけられた。一つ目之橋を渡る一つ目通りは、両国の回向院の脇から南北に走っていた。

川岸にある「芭蕉記念館」を目指したのだが、資料の燻蒸消毒作業のため臨時休館とのことで残念ながら入ることはできなかった。
元禄2年（1689年）、松尾芭蕉が奥の細道の旅に出た時、起点になった場所と言われている。芭蕉は、ここから知人の舟で千住まで行き、日光街道を北上した。
隅田川に沿って路地に入ると、ビルに押しつぶされそうな所に芭蕉稲荷神社があった。延宝8年に杉山杉風に草庵を提供されて住み着き、「芭蕉庵」と名付けていた。
芭蕉の没後は武家屋敷となったが、幕末には消滅していたらしい。大正6年の津波襲来で洗い流された結果、芭蕉の遺品が発見され、地元有志の尽力により芭蕉稲荷神社として残された。
「ふるいけや　かわずとびこむ　水の音」の句碑が建っている。

<3>　正木稲荷神社

芭蕉稲荷神社の筋向かいに建つのが正木稲荷神社。創建時期は不明だが、元の名は「柾木稲荷神社」だったらしい。境内に柾木が二本あったことからこの名が付いたとの記録が残っている。
祭神は宇迦魂命と応神天皇で、できもの・腫れ物に効くとして崇められた。
また、隅田川から小名木川に入る水路の分岐点の目印としても珍重されたらしい。

<4>　萬年橋

正木稲荷神社の前で小名木川を跨ぐのが萬年橋。架橋された時期は不明らしいが、前述の様に小名木川が開削された時期（1661年）を考えると、1600年代の後半にできたのではないかと考えられる。
中川船番所が開設される前には、ここに番所があったので、江戸時代のある時代の地図には「元番所」と書かれているらしい。葛飾北斎の富嶽三十六景に描かれている萬年橋は、木造のアーチ型の橋になっている。
関東大震災で被害は受けたが焼失はしなかった。復興の一環で昭和5年に架け替えられたが、タイドアーチ式鉄橋という堅固な造りになった。隅田川に架かる永代橋・清洲橋などとともに景観も美しい橋として注目を浴びてきた。様々な角度から見て、それぞれの味わいがある萬年橋を何枚か撮影して橋を渡り清澄に足を進めた。

<5>　深川稲荷

萬年橋を南側に渡り小名木川に沿って東へ行くと、路地裏に深川稲荷があった。
1630年（寛永7年）に創建された。小名木川に沿って船大工が住む町だったことから、この辺りは西大工町と言われ、西大稲荷とも呼ばれた。深川七福神のひとつで「布袋尊」が祀られている。
石柱に刻まれた寄進者の名前の中で、「大鵬幸喜」という文字がひときわ大きく輝いていた。

<6>　相撲部屋の街

萬年橋を渡って小名木川に沿って東へ歩くと、静かな家並みの中に高田川部屋がある。その先には尾車部屋もあったのだが、この部屋は閉鎖になってしまった。
高田川部屋は施錠されていて誰もいない上に、相撲部屋独特の鬢付け油の香りもしなかったので、おそらく巡業中なのだろう。立派な看板に大きな文字で書かれた部屋の名前と、どっしりした相撲部屋独特の重厚な造りが異彩を放っている感じがした。
さらに清澄方面へしばらく歩くと錣山部屋もあり、この辺りは相撲好きには垂涎の町。

<7>　清洲寮

清澄庭園を正面に見ながらまっすぐ進むと清洲橋通りに出る。清澄通りとの交差点から、化粧直しをしていささか若返った清洲寮をカメラに収めて清澄白河駅に入った。
清洲寮は、関東大震災からの復興に際して昭和8年に建てられた民間の集合住宅で、当時ヨーロッパの街作りと集合住宅を参考にして建造されたもの。
また、清澄庭園の東側と南側にある店舗付集合住宅は、同時期に東京市が造ったもので、官民あげて大震災からの復興の街作りに取り組んでいたことがわかる。

<8>　旅のゴールは門前仲町

久しぶりに富岡八幡に立ち寄ってみた。ここには外国人観光客はいなかった。礼儀作法を知っている日本人、しかも地元の人と思われるほとんどの参拝客が、鳥居の下で一礼してから境内に入っていくのが印象的だった
境内のベンチで小休止の後、永代通りに出て、「甘味処由はら（ゆはら）」でクリームあんみつを食べてひと休み。
あんみつの味が残る舌を、ブラックコーヒーで締めて、本日の「深川ぶらぶら歩き」は閉幕とした。

以上